金石城跡と庭園

金石城は 1528 年の築城から 17 世紀後半まで、対馬の大名家である宗家の本城であった。当初は比較的シンプルな館であったが、1660 年代には城壁や物見櫓を備えた城郭となった。対馬と朝鮮半島との交易で栄えた利益を財源に、城下町である巖原が火災に遭い、再建されたのと時を同じくして拡張されたのである。

しかし、金石城は拡張されても宗家にとって不十分だったようで、1678 年、より大規模な棧原城に居を移した。この移転は、朝鮮からの通信使を迎えるという外交上の任務と関係があったのだろう。使節団は対馬を経由して江戸幕府に派遣され、その人数は 450 人を超えることもあった。宗家は対馬で使節団の宿泊と江戸までの随行などを担当した。

宗家は金石城を別邸として残し、1690 年代に心字池を中心とした小さめの庭園を造営した。城が最後に公式に使用されたのは 1811 年、朝鮮王朝最後の使節団が来日した際、将軍の使者の宿所として使用された時である。その時の朝鮮通信使は双方が決めた経費節減策として、対馬より先足を伸ばさなかった。

現在、対馬博物館となっている敷地には、金石城の城壁が一部残っており、大手口の櫓門が復元されている。庭園は埋め立てられていたが、1990 年代に復元され、一般に公開されている。